

【巻頭言】

「将棋と文学研究」について

——文学史とは別の仕方

木村政樹

将棋と文学研究会は、「将棋と日本文学の関係について、幅広い観点から明らかにしていくことを目指して」¹活動を行なってきた。その際、「将棋と文学」というテーマについては、あらかじめ方法や範囲などを固定するのではなく、柔軟に捉えてきた、といつてよい。複数の分野を跨いだ多様な研究の場を作っていくにあたって、それは必要なことであった。実際、本研究会の活動を通して、従来の専門分化した領域に収まらない、興味深い考察が多く生み出された。前著『将棋と文学スタディース』と、その第二弾企画である本書は、そうした意味での「将棋と文学研究」についての成果報告であるといえる。

他方、私を含めた本研究会参加者の一部は日本近代文学研究

を専門領域としており、その領域内部での研究の意義といったものを、どこかで意識していたこともたしかである。このことの意味については、改めて考えてよいように思う。そこで以下、本研究会が進めてきた「将棋と文学研究」を、日本近代文学研究における「文学史」と対照しつつ、文学史とは別の仕方であるための手がかりを提示してみたい。

一 文学史と「将棋と文学研究」

文学についてある歴史的な見通しを与えようという試みは、一般に「文学史」と呼ばれる。現在の日本近代文学研究では、これまでの研究蓄積をはじめとする膨大な前提をふまえたうえで、文学史についても種々の議論や考察がなされてきた。たとえば最近では、日本近代文学会の機関誌『日本近代文学』第一〇六集（二〇二二年五月）が「文学史はどこから来て、どこへ行くのか」という特集を組んでいるほか、凡庸の会同人の雑誌『文学±』が、文学史をめぐる座談会を企画している。

『文学±』3号では、文学史に関する最近の研究動向についてもふれられている。座談会「大正文学史批判」のなかで中沢忠之は、「通史的な歴史の組み立て方が権威的だと批判されて以来、多様なテーマごとに歴史を記述するという方法」が有力に

なり、「文学を多様な「型」の集積として把握して、それらの変化を時代の推移に従ってゲーム的に見ていく」文学史が隆盛しているという。そうした文学史は、「ポストヒストリカルな文学史といえよのかな」と評されている²。

こうした診断をふまえるならば、一見したところ、「将棋と文学研究」もまた、テーマ別文学史の試みのひとつに見えるかもしれない。この点は色々な考えがあるかもしれないが、私個人の意見を述べれば、「将棋と文学研究会」のこれまでの成果は、テーマ別文学史の試みとは別のものとして把握可能だと思し、そのように把握することで、未来の「将棋と文学研究」のあり方を展望することにも繋がると思っている。

本研究会メンバーの小谷瑛輔は、前述の座談会に出席しているが、そこで「文学史」について次のように述べている。「今僕がいつているのは、どういうことをやるかという話ではなく、やっていることは同じような場合もあるのかもしれないけれど、そのやっていることをどう呼びたいか、呼びたくないかという話にすぎないと思うんですが、僕は自分がやることを「文学史」という大きい言葉で語りたいとか、そう呼べることを目指したいという気があまりないんですね」³。

小谷の主張は次のようなものである。今は情報が膨大にあるため、「自分が関われることはそのワンオペゼム」にすぎない。

とはいえ、「ワンオペゼムでも今見て面白いというような知見を付け加えることには意義がある」。しかし、「ワンオペゼムとして面白ければそれでいいのに、「文学史」といった途端に「これこそがみんなに共有されるべき歴史だ」みたいな強い主張が宿ってしまう。小谷は、「そこに無理を感じてしまう」という⁴。

以上から判断すると、小谷が「文学史」という言葉を自分の研究に使わない理由は、「文学史」という言葉が正統な歴史というものを連想させてしまうからであるといえよう⁵。しかしながら、中沢が先に述べていたのは、すでに文学史は「ポストヒストリカル」なものになっているということであった。

だとすれば、問題の所在は、ある研究が「文学史」か否か、というところにはないだろう。ここで重要なのは、自他の研究について、それを正統的な文学史であると位置づけるか、(中沢がいう意味での)テーマごとの文学史のようなものであると位置づけるか、そのどちらでもない位置づけるか、ということである。もちろん、このように問いを変換したとしてもそれは、研究内容についてというより、それをどう呼ぶのかという水準の問題が入ってしまうことは避けられない。ただ、この問題に限らず、メタ言説や自己解説というものはそういうものでもある。そこで、ひとまずこのように問題を整理したうえで、「将棋と文学研究」についても考えてみたい。

二 自律したジャンルの歴史という問題

「将棋と文学研究」の成果を概観していえることは、「文学史」のひとつと考えるには現状の通念からしても無理がある研究が存在しているということである。強いていえばそれは、「将棋史」に属している、といえるかもしれない。この点からいって、「将棋と文学研究」では、正統的文学史であろうとテーマ別文学史であろうと、あるいはほかの文学史であろうと、無理に「文学史」という枠組みに回収させる必要を感じない考察が展開されている。

このような事態について、どのように考えればいだろうか。もちろん、将棋関係者にとっては、将棋の歴史はアイデンティティを証明するための正統な歴史にも（あるいはテーマ別の歴史にも）なりうるため、この意味では「文学史」同様の問題を考えることができる。それはそれで問われるべきことだと思いが、おそらく将棋の非専門家から見れば、「将棋史」はそれとは異なる役割を持つものとして映るだろう。

すなわち、将棋の歴史というものは、「○○の歴史」という無数の歴史（たとえば、「テニスの歴史」「鉛筆の歴史」「コンピニの歴史」など）のひとつとして——小谷の言い方を借りれば「ワンオブゼム」として——捉えられるのではないか。この

ように見れば、「歴史」のなかには幾多の「○○の歴史」が存在し、そのなかで「将棋の歴史」と「文学の歴史」がフラットに並んでいる、という光景が現出することになる。

これはとことんまで「ポストヒストリカル」な歴史が貫徹した世界であろうか。私は特にそうは思わない。たしかに、「文学」というものに突出した価値を与える人から見れば、「文学の歴史」と「将棋の歴史」が等価であるという歴史観は耐え難いものかもしれない。しかし、このような視座をとったとしても、「文学の歴史」も「将棋の歴史」もそれぞれ存在している」とみなされていることが重要である。文学という自律したジャンルについての歴史を「文学史」と呼ぶならば、この「文学史」自体も数ある「歴史」のなかで自律したジャンルとみなしうることになろう。ここでは、自律したジャンルの歴史（の自律性）は維持されたままなのである。

このような考えについては、たとえば次のような異論が考えられる。なるほど「文学史」は自律したジャンルとしての「文学」をめぐる歴史であって、将棋のことしか書いていない歴史書のようなものはそこに含めることができない。だが、将棋についての言説や出来事を「文学史」が排除しているわけではない。複数の「○○の歴史」の交錯のなかでこそ、「文学史」の豊かさもまた捉えられるのだ。

このような主張を想定したうえでなお問われなければならないのは、右の見解においても、結局のところジャンルの自律は維持されており、だからこそ「文学史」が目指されていることである。では、この「文学史」という名称を放棄すればよいのかというと、話は複雑だ。というのも、もし「文学史」ではないのならば、いったい何を対象にして歴史が語られているのか、という疑問もまた生じるからだ。

もちろん、ジャンルのな位置づけの曖昧な歴史が認められていないわけではない。ただ、方法的な問題とは異なるが（それでも）留意すべきなのは、そうした歴史が、どのような研究領域にインパクトを与えるのか、どの専門領域に寄与しているのか、よくわからなくなってしまうがちであることだ。フラットな歴史であったとしても、研究の意義や価値を明確にする枠組みは必要とされる。こう考えて見れば、テーマ別文学史はそうしたことを織り込んで、あえて「文学史」として書かれているのだともいえるだろう。

「将棋と文学研究」はテーマ別文学史として——それらしい言い回しをするなら、「将棋」の文学史」として——捉えられべきだろうか、という問いは、少なくとも以上のような議論をふまえたうえで立てられなければならないだろう。次節ではこの問題についての私見を示すが、繰り返せばこれはあくまで

個人の意見であって、本研究会の見解というわけではない。研究会内外での議論を喚起するためのものと受け取っていただけると幸いである。

三 将棋にとって「文学」とは何か

先ほど私は、「将棋と文学研究会」のこれまでの成果は、テーマ別文学史の試みとは別のものとして把握可能だと思し、そのように把握することで、未来の「将棋と文学研究」のあり方を展望することにも繋がると思っている」と書いた。これは別に、「将棋と文学研究」をテーマ別文学史として把握することは不可能だといっているのではない。そういう解釈とは別の把握の仕方を考えてみたいのである。

「文学史」という試みは、前節で述べたように、日本近代文学研究という専門領域で新たな知見を提示できるかという問題に関わっていた。ただ、これもまた、白か黒か明瞭というわけでもない。ある研究成果が、専門家の幾人かに資するものを提示できていれば、その評価が様でなかったとしても意義があると考えなければ、研究者共同体という緩やかな価値認定のネットワークの実態とは乖離した認識を生み出してしまいうだろう。専門領域への寄与は、研究方法の問題というより、実践的

な問題であるといえる。

そこで、方法的な問題に話を戻せば、もし「文学」ではないのだとしたら、何を歴史叙述の軸に置けばよいのか。この問いに対しては、「将棋」中心的な歴史というものがすぐに思い浮かぶ。将棋の近代化、ないしは将棋が社会的に価値あるものと認知されるシステムが成立するプロセスにおいて、いかに「文学」がそれに資するものであったのか、というパースペクティヴを採るのであれば、それはたしかに「文学史」と呼ぶ必要はない。その歴史叙述はいわば「将棋にとって「文学」とは何か」の歴史であり、通常の「文学史」とは異なる視界から「文学」を捉えたものになるだろう。

このような試みは、既存の「文学史」を相対化するものであり、かつ、文学研究者に対しても何らかの新しい認識を提示しうる歴史となりうる。私はそのような方向に「将棋と文学研究」が進んでいく道筋もあると思う。

重要なのは、このような試みの場合、将棋の近代化ないし社会的認知の確立に関与したのは「文学」だけではないということであり、「文学」以外の多様なネットワークのなかのひとつとして、歴史のなかに「文学」が登場するということである。

たとえば、小笠原輝が前回の論集で試みたのは、棋士の食事情報をめぐる歴史であった。棋士が何を食べたのかといったこ

とが話題となり、それが「将棋めし」として知られる現在において、小笠原の研究はその歴史的な由来を明らかにしようとするものだ。もちろん、「文学」の定義を拡張すれば「将棋めし」も文学だと考えることもできるが、オーソドックスな用法としての「文学」とはまったく異なる対象についての研究だといえる。

ただ、小笠原の考察を仮に「棋士についてのイメージの研究」として位置づけるならば、同様の枠組みから「文学」が研究対象に入ってくる——つまり、棋士イメージの形成に関わった媒体として「文学」が把握される——ことにもなるだろう。通常の「文学史」では、「将棋めし」と「文学」を並置するような視座を採ることはできない。したがって、このような研究をあえて「文学史」と呼ぶ必要もないだろう。

このように、研究の内容、および研究者のスタンス次第では、「将棋と文学研究」の成果を、従来型の「文学史」とは別様のものだと考えることは、不自然なことではない。むしろ、無理をして「文学史」と名乗ると、その研究の特質がええって見えにくくなる可能性もあるのだ。

四 領域について

こうしてみると、論理的にいえば、軸に置くのは「文学」で

も「将棋」でもないものでもかまわないことになる。〇〇を軸に置き、その歴史に「将棋」と「文学」がたまさか関わっているならば、それもまた「将棋と文学研究」であり、かつ「文学史」ではない（「将棋史」でもない）、ということになるだろう。

しかし、ここでまたひとつの問題が生じる。つまり、「文学」中心、「将棋」中心であることは脱却したが、そうした歴史も結局のところ、ほかの何かを中心にして記述せざるを得ないのではないか、ということである。それは、あの正統な歴史という価値観を密輸入して復活させるものではないか、という疑問も生じる。

これに対して、方法的な革新性のある将棋研究⁶の意義をこの脈絡において吟味してみるといふ応答もありうるだろう。それもまた重要な論点だと思うが、ここで私が気になるのは、何かを中心にして歴史を叙述するということ、いや、もっと広くとって、特定の領域を研究対象として設定することが、何を狙っているのか、ということである。

ここで想起したいのは（少々唐突に思えるかもしれないが）、ミシェル・フーコーが『知の考古学』のなかで、研究の対象として見出す領域について述べている次のくだりである。

「……そのようにして出現しうる諸関係のすべてを、目印なしに

記述することなどできるはずがない。まずはおおよっぱな見取りを行い、仮の切り分けを受け入れる必要がある。つまり、元からある領域を受け入れて、必要に応じてそれを分析によって覆したり再編成したりすべきであるということだ。⁷

ここで注目したいのは、領域を確定したものとみなすのではなく、「分析によって覆したり再編成したりすべき」ものだと捉える考え方だ。フーコーは、まずは「仮の切り分けを受け入れる必要がある」ことの重要性を語っているが、このことは極めて示唆的である。

「将棋と文学研究」においてもやはり、各自による研究対象の設定、ある領域の選択が行われる必要がある。その領域がどのようなものであるかについては、各自の論の立て方に委ねられている。その際に、論者自身によってある種の連続性が作り出されることによって、断絶しているはずの知が観念的に統合されてしまうといったこともありうるだろう。この点は、正統的な文学史だけではなく、テーマ別文学史においてもなお、注意されるべきことである。

他方で、研究対象の領域をまったく設定することなく、内在的なネットワークのみを追いかけるわけにもいかない。あらかじめ対象を絞り込むことによって、はじめて分析は開始され

る。また、そのような研究対象への介入こそが、既存の学問領域に対するパフォーマティブな態度決定ともなりうる。

ひとつの研究対象をさしあたり確定すること。それは、論者が一つの専門に収まることをただちに意味するわけではないだろう。また、それをもって既存の学問分野の方法から脱却できなくなるわけでもない。分析を通じて見出された関係性こそ、新しい知見は宿る。

「将棋と文学研究」を通じて目指されるべきものが、「文学史」でも「将棋史」でもないのだとすれば、この二つの枠組みに回収されることを拒もうとする「歴史」を不断に発掘しようとする試みこそ、重要となるのではないだろうか。そして、そのような試みを維持するにあたっては、前節で述べたのとはまた違った意味において、テーマ別文学史とは異なる「将棋と文学研究」のあり方を構想する必要があると考えられる。前著と本書はそのためのまたとない資源であり、未来の思考を切り開くための手がかりとなるだろう。

なお、今後の本研究会の活動として、秀明大学出版会より将棋と文学に関するアンソロジーの刊行が計画されている。そのほか、小谷瑛輔が将棋と文学についての新書を執筆中であり、こちらも近く刊行される予定であることを付記しておきたい。

1 将棋と文学研究会ウェブサイトをより引用。

<http://www.iscneijac.jp/~kotani/shogi/>（最終閲覧日二〇一三年二月一日）

2 「大正文学史批判」『文学士』3号、二〇二三年七月、四七頁。中沢はこの座談会のメインの出席者ではないが、凡庸の会同人であり、終盤に登場している。

3 同右、四九頁。

4 同右、四八―四九頁。

5 この小谷の意見に対して木村洋は、「仮に文学史が権威的であるように見えるとしても、それは日本文学研究という小さな村の話」であって、「むしろ文学史に権威がなすすぎることをわれわれは嘆くべきではないか」と述べている（木村洋「読者を面白がらせる力」『日本文学』二〇二三年一月号、七七頁）。木村は「読者を面白がらせる力」をキーワードにしているが、文学史の「読者」は、個別作家研究の専門家、日本近代文学研究者、その隣接諸領域の研究者、文学や人文書に関心のある一般読者など多様であり、書物それぞれの価格や部数、読者層の差異も含めて繊細に考えていくべきではないだろうか。

6 ラトゥールのアクターネットワーク論や人類学の「存在論的回転」をふまえて書かれた、久保明教「機械カニバリズム 人間なきあとの人類学へ」（講談社、二〇一八年）の議論が挙げられる。

7 ミシエル・フーコー『知の考古学』慎改康之訳、河出文庫、二〇二二年、六〇頁。同書の以下の箇所も参照。「ここから説明されるのが、非常に図式的に言って「人間諸科学」と定義するものとみなしうよう

な諸言説に対し、私が付与した事実上の特権である。しかしこれは、出発点における特権にすぎない。二つの事実を心に留めておく必要がある。すなわち、一方において、言説的出来事の分析は、決してそうした領域に制限されるものではないということ、そして他方において、その領域そのもののそうした切り分けは、決定的なものであるとも、絶対的に有効なものであるともみなされえないということである。問題は、最初に素描された境界を消し去ることになるかもしれない諸関係の出現を可能にすべく、最初のおおざっぱな見直しもりを行うことなのだ」(六一―六二頁)。

〔東海大学〕